松井太「敦煌諸石窟のウイグル語題記銘文に關する箚記（二）」
『人文社会論叢』人文科学篇32, 27-44.
Matsui, Dai 2014 : Notes on the Old Uigur Wall Inscriptions in the Dunhuang Caves (II).
Studies in Humanities (Volume of Cultural Science) 32, 27-44.

敦煌諸石窟のウイグル語題記銘文に關する箚記（二）

松　井　　太

はじめに

敦煌地域の諸石窟（莫高窟，榆林窟，東千佛洞，西千佛洞など）に殘された石窟壁畫には，漢語・チベット語・西夏語・ウイグル語・モンゴル語などの諸言語による銘文が記されているものがある。筆者は，これらの諸言語銘文のうち，西暦10～14世紀に屬する古代ウイグル語および13～14世紀のモンゴル時代に屬するモンゴル語の銘文資料を繼續的に調査している。これらの銘文資料が，10～14世紀の敦煌地域の歷史，とくに敦煌の諸石窟を中心とするウイグル佛教徒の信仰や巡禮の態樣を解明するための貴重な一次資料となることは，筆者の調査成果の一部を紹介した前稿［松井 2013］でも示した通りである。

本稿は，前稿に引き續き，この間の筆者によるウイグル文・モンゴル文題記資料の調査の成果から，歷史學的に重要な情報を提供することを目的とする（なお，前稿との比較參照の便に鑑み，節番號は前稿から連續させている）。

5．莫高窟第409窟の「ウイグル王」供養人像の傍題

敦煌の歷史において，西暦11世紀初頭～中葉を，敦煌（沙州）がウイグル勢力に支配されていた時期すなわち「沙州ウイグル期」として畫期することは，歷史學・美術史雙方の立場からほぼ承認されている。しかし，この「沙州ウイグル」が，東部天山地方を據點とする西ウイグル王國の傘下にあった集團であったか，それとも西ウイグルから獨立した一王國を形成していたのかという點については，學界ではなお論爭が續いている。

「沙州ウイグル」という概念をはじめて提唱した森安孝夫は，現在までに中國の學界で優勢となっている「沙州ウイグル獨立王國説」を，多數の論據を擧げつつ批判し，沙州ウイグルは一貫して西ウイグル王國の傘下にあったと主張している［森安 2000; 森安 2011, pp. 527-529］。その所論はおおむね肯綮にあたると考えられる。

ただし，森安の論據の一つは，「沙州ウイグル期」に屬する敦煌諸石窟の供養人像の裝束が，トゥルファン地域の西ウイグル時代の佛教石窟に描かれたウイグル供養貴人像の裝束とほぼ一致する點にある［森安 2000, p. 25; 森安 2011, pp. 527-529; cf. 謝靜・謝生保 2007, p. 82; 竺小恩 2012］。しかし，西ウイグルから政治的に離反・獨立した集團が，文化要素としての西ウイグルの裝束をそのまま襲

用することはあり得るので，供養人像の装束の一致は，沙州ウイグルが西ウイグル傘下にあったことを決定づける論據とはならない。現在の敦煌學界で「沙州ウイグル獨立王國説」を代表する楊富學は，装束の一致に關する森安らの指摘を認めつつも，これらの肖像を西ウイグルから獨立した「沙州ウイグル王國」の君主・貴人たちのものとみなしている［e.g., 楊富學 2013, p. 269］。

このような問題を解決するためには，これらの「沙州ウイグル期」石窟のウイグル供養貴人像に付された傍題から彼らの人名や稱號を讀み取り，西ウイグルの諸種文獻にみえるウイグル支配層中の人物と同定することが，より直接的な手がかりを提供するはずである。森安による沙州ウイグル期石窟（楡林窟第39窟前室甬道北壁，莫高窟第148窟甬道・第409窟，西千佛洞第13窟）の傍題銘文の解讀は，そのような試みの一環であったが，殘念ながら，これらの供養貴人像の所屬を決定づける情報はなお得られなかった［森安 2011, pp. 523-529］。

これに對し，筆者は，森安の言及しなかった楡林窟第39窟前室甬道南壁のウイグル男性供養貴人像の傍題を「イル=オゲシ（il ögäsi, 宰相）のサングン=オゲ=ビルゲ=ベグ（sangun ögä bilgä bäg）」と解讀しつつ，そのうちの「サングン=オゲ（sangun ögä）」が西ウイグル王國の「沙州將軍」に相當する稱號である可能性，および人名「ビルゲ=ベグ（bilgä bäg）」が西ウイグル時代のウイグル語文書にみえる同名の宰相（il ögäsi）に同定される可能性を提示しておいた［松井 2013, pp. 30-33］。

さらに筆者は，2013年12月24日に，莫高窟第409窟の主室東壁南側に描かれる「ウイグル王」[1] 像【圖版１】の傍題を再調査し，わずかではあるがこの問題の解明につながる情報を得た。



この「ウイグル王」の前方（北側＝向かって左側）には，上下約 132 cm, 幅約 10.5 cm の區畫がある。この區畫が，この「ウイグル王」像の人物同定のための傍題に使用されていたことは確實である。そして，この傍題の上から約 52～65 cm の部分には，右に模寫したような銘文２行を判讀することができた。その解読は以下の通りである。

銘文５：莫高窟第409窟，主室東壁南側，先頭の「ウイグル王」供養人像の北側傍題。

01　il alsran xan　　イル=アルスラン=ハン
02　　män sävg(i) ----　　私セヴギ‥‥

“(This portrait is of) İl-Arslan-qan. I, Sävgi (?) (wrote this?)”

1）この供養貴人像は長らく「西夏王」とみなされてきたが，やはりトゥルファン地域の西ウイグル供養貴人像の装束との一致から「沙州ウイグル期」に描かれた「ウイグル王」とみなす見解が，現在ではほぼ承認されている［森安 1982; 森安 2000, p. 22; Russel-Smith 2005, pp. 69-70, 231-232; 謝靜・謝生保 2007, p. 82; 森安 2011, p. 524; 竺小恩 2012］。

森安孝夫と筆者は，つとに2006年の現地調査において，第１行冒頭のイル（il ~ el:「くに，ひとびと，部衆，國家」の語を判讀していた[2]。後續の alsran = ”LSR’N は，「獅子，ライオン」を意味する古ウイグル語 arslan = ”RSL’N の語中の -L- 字のフックを添加する位置を誤ったものである。周知の通り，ハン（xan ~ Mong. qan）は「君主，王」を意味する。第２行の män = MN は明瞭であるが，後續語は不鮮明である。假に sävgi (~ sävigi < sävig, あるいは sävgü < sävüg) と轉寫して，題記の筆者の人名とみなしておく。ただし，Š’ČW = šaču「沙州（敦煌）」と讀んで，題記の筆者の出身地を示している可能性も否定はできない。これ以降は，墨書が摩滅していて判讀不可能である。

以上，この傍題銘文の「イル=アルスラン=ハン（il arslan xan）」とは，「（ウイグル）國の獅子王」を意味する稱號となる。よく知られているように，漢文資料では西ウイグル（「西州回鶻·亀茲回鶻」）の國王はしばしば「師子王」と稱される[3]。西暦981年に北宋に遣使してきた西ウイグル王の稱號「西州外生（ママ）師子王阿厮蘭漢」のうち，末尾の「阿厮蘭漢」は arslan xan の音寫であり，先行する「師子王」はその漢譯と考えられる。これと同一の西ウイグル王は，トゥルファン出土ウイグル語文獻には arslan bilgä tängri ilig「獅子（のごとく勇猛）にして賢明なる天王」として言及される。1020年に北宋に朝貢した「亀茲王」すなわち西ウイグル王も「可汗師子王智海」と稱しており，そのウイグル語による正式稱號は kün ay tngridä qut bulmïš uluγ qut ornanmïš alpïn ärdämin il tutmïš alp arslan qutluγ köl bilgä tngri xan「日神·月神より天寵を得て，大いなる天寵を受け，勇猛さと果敢さにより國を保つ，勇猛なること獅子（のごとき），天寵もち，湖（のごとく）知恵深き，神聖なるハン」である。さらに，1067年のウイグル語譯『彌勒會見記（Maitrisimit）』ハミ寫本にみえる西ウイグル王の稱號は，tngri bögü il bilgä arslan tngri uyγur tärkänimiz「神聖にして賢明なる，國（の），知恵深く獅子（のごとき）聖なるウイグル王公」である［森安 1991, pp. 183-185］。また，周知のように，キタイ帝國（契丹，遼）に入貢した西ウイグル王國はしばしば「阿薩蘭回鶻」すなわちアルスラン=ウイグル（Arslan Uyγur）と稱されている［安部 1955, pp. 359-360; 森安 2000, p. 27］。

以上の諸史料にみえる西ウイグル國の國號や王號を勘案すれば，この莫高窟第409窟の銘文の「イル=アルスラン=ハン（il arslan xan）」も，西ウイグル國王をさすことはほぼ確實である。とすれば，銘文の書き手であったウイグル人セヴギ（Sävgi）は，ここに描かれた「ウイグル王」像を西ウイグル王のものと認識して，「イル=アルスラン=ハン」の稱號を記したものと推定される。

ただし，銘文の書き手のこのような認識が正確であったか否かについては，一抹の疑問も殘る。現地調査で確認したところ，この銘文は，傍題の區畫の上部に 50 cm 以上もの空白を殘して記されており，その空白部分には銘文が記されていた形跡がほとんど殘っていない。これはいささか不自

２）翌2007年に再調査した際にはこの il ~ el の語は判讀できなかったことが報告されているが［森安 2011, p. 524］，これは確認が不十分であったためである。

３）『宋會要輯稿』蕃夷４・亀茲（中華書局版，p. 7720）「龜茲，回鶻之別種也。其國主自稱師子王。‥‥或稱西州回鶻，或稱西州龜茲，又稱龜茲回鶻，其實一也」。『宋史』巻490・外國傳·亀茲（中華書局版，p. 14123）もほぼ同文。

然である。また，銘文の書體にも注意を要する。さきに森安は，この銘文の書體を西ウイグル時代に特徴的な半楷書體とみなした［森安 2011, p. 524］。しかし，この銘文の書體は，例えば上述の楡林窟第39窟の西ウイグル時代の傍題［松井 2013, pp. 30-33］のような典型的な半楷書體とは異なって若干肉細であり，むしろモンゴル時代の文獻にみられる「丁寧な草書體」とみなされるべきである。

そこで筆者は，この銘文が記されるに至った状況を，以下のように考えたい。まず，この莫高窟第409窟に「ウイグル王」の供養人像が描かれた際には，彼の有していた（より長大な）稱號が題額の全域に記された。しかし，それは何らかの理由で塗抹された。その後，モンゴル時代以降になって，あらためてこのウイグル王像を「イル=アルスラン=ハン（il arslan xan）」つまり西ウイグル王と認識する舊西ウイグル國人により傍題銘文が再度記された。すなわち，この傍題銘文は，問題のウイグル王像が西ウイグル王であったこと，また彼が沙州を直接的に支配下に置いていたことを立證する同時代資料とはいえないこととなる。

とはいえ，モンゴル時代のウイグル人は，漠北のウイグル可汗國時代にまでさかのぼる「民族史」叙述の傳統を有していた［森安 2002; 茨默 2009; Zhang / Zieme 2011; 森安 2013, pp. 140-139］。たとえ，この莫高窟第409窟の傍題銘文がモンゴル時代のウイグル人によって記されたものだとしても，彼らがこのウイグル王像を「イル=アルスラン=ハン」つまり西ウイグル王と稱した背景には，それなりの歷史的な知識があったことを想定してもよいと思われる。

いずれにせよ，このウイグル王像の最終的な同定については，この銘文５，あるいはその下に塗抹されているはずの本來の傍題を，より嚴密に解讀することが必要である。中國側の諸研究機關がこの傍題のＸ線撮影・赤外線撮影などを實施し，鮮明な状態で學界に提供することを期待したい。

６．ウイグル佛教徒の文殊信仰と敦煌石窟

佛教において悟りを得るための智慧を司る文殊師利菩薩（Skt. Mañjuśrī bodhisattva）に對する信仰は，東アジア諸地域の佛教徒に廣くみられるものである。ウイグル人佛教徒のあいだにも文殊菩薩信仰が存在したことは，いくつかの出土文獻から確認できる。

例えば，11世紀以前の敦煌藏經洞出土のウイグル語佛教文獻（Or. 8212-121）は，漢文佛典『佛説無量壽經』（Taisho, Vol. 12, No. 360）に對應する内容をもつ。漢文テキストは「十六大士（菩薩）」を列擧した後，それらが「皆，普賢大士の德に遵う」とするが，對應するウイグル文では「この十六の菩薩たちは，みな普賢と文殊師利‥‥菩薩【後缺】（bu altï ygrmi bodisvt-lar alqu tüzü tüzün mančuširi [...] bodisvt [...]）」となっており，漢文にはない文殊師利（mančuširi < Skt. Mañjuśrī）が挿入されている［MOTH, p. 26］。

モンゴル時代のウイグル人佛教徒の間で弘通した文殊菩薩關係の經典としては，『聖妙吉祥眞實名經（(*Ārya-*) *Mañjuśrīnāmasaṃgīti*）』が特筆される。この經典のウイグル譯本の斷片はドイツ=トゥルファン探檢隊將來ウイグル語資料中に多數確認されており，３ないし４系統の刊本があったと推定される［BTT VIII, Text B; Kara 1981, p. 233; UBL, pp. 114-116］。その識語の斷片（U 4759）からは，

このウイグル語への飜譯事業が，大元ウルス宮廷に仕え國師パクパ（'Phags pa, 1235-1280, 國師在位 1261-1270, 帝師在位 1270-1274）にも師事したウイグル人高僧カルナダス（Karunadas > Chin. 迦魯納答思）により，西暦1302年に大都の「白塔寺」すなわち大聖壽萬安寺（現在の妙應寺）で完成されたことが判明する［BT XIII, Nr. 50; BT XXVI, Nr. 48; 中村 2013, pp. 16-17］。

ウイグル語譯『聖妙吉祥眞實名經』がモンゴル時代のウイグル佛教徒の間で實際に流行していた様子は，敦煌莫高窟北區將來のウイグル語書簡（Pelliot Ouïgour 16 bis）の内容からうかがえる。この書簡は「安藏博士の飜譯した『眞實名經』（Antsang baxšï-nïng aqtarmïš namasanggid）」などの經典の授受に關係するものである。この書簡で，『眞實名經（Uig. *Namasanggiḍ* < Skt. (*Mañjuśrī-*) *nāmasaṃgīti*）』の譯者として言及される「安藏（Antsang）」は，前述のカルナダスの師であったウイグル人高僧であった［森安 1983; Hamilton 1992］。さらに，モンゴル時代に釋智によってチベット語から漢語に飜譯された『聖妙吉祥眞實名經』（Taisho, Vol. 20, No. 1190）の漢文テキストをウイグル文字で音寫した斷片も數種が確認されており［Kara 1981; Zieme 1996; 庄垣内 2003, pp. 1-26］，漢語譯本もウイグル人佛教徒により廣く讀誦されたことが知られる。

これ以外にも，文殊信仰に關わるモンゴル時代のウイグル語佛典として，トゥルファン地域發現の『文殊師利成就法（*Mañjuśrī-sādhana*）』斷片［小田 1974］や，敦煌莫高窟北區發現の『文殊師利所説不思議佛境界經（*Acintyabuddhaviṣayanirdeśa*）』の識語斷片［Abdurishid 2006, pp. 24-27; BT XXVI, Nr. 11］が知られる。前者はモンゴル時代にチベット語原典からウイグル語に飜譯されたもの，後者はトゥルファン地域の主要都市リュクチュン（Lükčüng）出身のチスン（Čisön < Chin. 智全／智泉）都統によって14世紀後半に漢文原典からウイグル語譯されたものである。またドイツ隊將來資料には，モンゴル時代に典型的な草書體ウイグル文で書かれた，文殊師利を讃美する頭韻詩の斷簡（Ch/U 7118v）もある［BT XIII, Nr. 32］。さらに，泰定３年（1326）立石の漢文・ウイグル文合璧『重修文殊寺碑』は，チャガタイ系豳王家當主ノムダシュ（Nomdaš）が「聖なる文殊師利の僧院に兄弟王子たちとともに禮拜すべく（$_{13}$ary-a mančuširi-ning sangram-ïnta $_{14}$aqa ini-lär birlä yuḳüngäli）」，肅州南方の文殊寺を訪れ，この寺院を重修して「聖なる文殊師利を請わせて（$_{21}$ary-a mančuširi-ni činglaḍïp）」鐘樓や碑石を建てたと傳える［耿世民・張寶璽 1986］。中央アジアから甘肅河西地域に東來してきた「東方チャガタイ家」王族と，その配下のウイグル人佛教徒における文殊信仰を反映するものとみることができよう［cf. 松井 2008a, p. 37］。

以上の例から，東部天山（高昌･トゥルファン）地域から甘肅河西（敦煌･肅州）さらには大都と，ウイグル人がモンゴル時代に政治的・經済的に活躍した地域と重なる形で，ウイグル佛教徒の文殊信仰が看取できる［cf. 楊富學 2004］。筆者が前稿で紹介した，莫高窟第61窟甬道南壁のモンゴル時代のウイグル語題記銘文は，高昌（Qočo）出身のウイグル人佛教徒が「西夏路（Tangut čölge）」つまり寧夏府路（現在の銀川）からこの窟の本尊であった文殊菩薩（mančuširi bodistv）に參拜した際に殘したものであり［松井 2013, 銘文4D, 4E］，これも上述したようなウイグル佛教徒の文殊信仰の擴がりと重なるものといえる。

筆者は，この間の敦煌諸石窟の現地調査を通じて，文殊菩薩信仰に關係するウイグル語銘文として，さらに以下の銘文6A ～ 6Eを確認することができた。いずれも草書體で書かれており，モンゴル帝國時代に屬するものとみられる。

銘文6A：莫高窟第138窟，主室北壁，先頭の女性供養人像の西側，草書體ウイグル文13行。第13行の斜體表記部分は，いわゆるパクパ（'Phags-pa > 八思巴）字で記されている。從って，この銘文が，パクパ文字の制定された西暦1269年以降に屬することは確實である。

01 ----------WX----- K kirtgünč (....)up
02 ---------- taγ? buqar? T(...) ---- (....)
03 ----------
04 ---------- pala ök bulayïn tip män darm-a širi
05 ---------- XY ”S T(..)KY namasangiḍ ögränip
06 ---------- -larïγ (..)L T(....) birlä sözläp
07 ----------(...)Č yol qy-a-nïng? burxan?
08 ---------- (säv)inč-siz tälim toluy (ö)güz täg? (..)TYK
09 ----------alḍan tigin : yana
10 qočo (....) biš (.....) darm-a širi qač käṣig
11 ky-ä bitiyü tägintim kinki körgüči (....) (.....)M
12 uluγ adam könčüg (.....)muz-nung ---------- (.)WNKWR? bar ärsär
13 ----------[sa]ṭu saṭu bolzun *b n di t n m s ŋ g[i](d)(. . . .) bu l su n*

01 ……信心……
02 ……山寺(?)……
03 ……
04 ……を得よう，と，私ダルマシリ
05 ……『眞實名經』を學んで
06 ……たちを……ともに説いて，
07 ……ヨル=カヤの(?)佛(?)
08 ……歡喜無きものが多く海(?)のような(?)……
09 アルタン=ティギン，さらに
10 高昌……五……私ダルマ=シリが幾行か
11 書き奉った。後世の見る者……
12 我が祖父のコンチュグ……の……があるならば，

13　……善哉，善哉。博士（の）『眞實名經』……を得ますように！

“.... $_{1}$belief .... $_{2}$the mountain temple(?) ..... $_{3}$ ..... $_{4}$“I shall obtain ....-*pāla*”, thus saying, I, Darmaširi, ... $_{5}$learning *Nāmasaṃgīti* .... $_{6}$.... speaking together, $_{7}$.... Yol-Qya'ṣ(?) Burxan(?) $_{8}$.... (there are) a lot of unhappy (people?), like(?) ocean .... $_{9}$Altan-Tigin, and $_{10}$Qočo .... five .... I, Darmaširi, $_{11}$wrote (this inscription of) several lines. Posterities to see (this inscription) .... $_{12}$my great father Könčüg .... if there is ...., $_{13}$.... *Sādhu, sādhu! Nāmasaṃgīti* of Master .... shall obtain ....!”

語註：　**6A2, taγ? buqar?** : 明瞭には判讀できなかったが，試案として「山寺」を推補しておく。なぜなら，敦煌諸石窟のウイグル語銘文には，莫高窟や榆林窟を「山寺（taγ buqar; taγ süm）」と稱する例が頻見するからである［e.g., Hamilton / Niu 1998, Inscriptions D, E, P, Q］。莫高窟を「山寺」と稱する漢語の題記銘文の例も，モンゴル時代はもとより西夏時代にまで遡って確認され[4)]，西夏語の題記銘文でも「山寺廟（^{1}shyan ^{2}miq' $^{2'}$yen）」，モンゴル語銘文でも榆林窟を「山寺（aγulan süme）」と稱した例が発見されている［荒川 2010, p. 53; 敦煌研究院考古研究所·内蒙古師範大學蒙文系 1990, p. 12］。すなわち，莫高窟や榆林窟に對する「山寺」という通稱は，漢人・西夏人・ウイグル人・モンゴル人の間で共通していたこととなる。敦煌地域における，言語を異にする佛教徒たちの文化的な交流を示唆するものといえる。

6A4a, --- pala : おそらく，語末に pāla “a guard, protector” をもつサンスクリット語の護法神名（Lokapāla, Dharmapāla, etc.）の借用語であろう。例えば「[……] =パーラ（の佛像）を得よう」というような文脈を想定できるかも知れない。　**6a4b, darm-a širi :** Skt. dharmaśrī に由來する人名。第10行から，彼が本銘文の書き手であったことが知られる。　**6A5, namasangiḍ** : ~ namasanggiḍ < Skt. (*mañjuśrī-*) *nāmasaṃgīti*.　**6A8, toluy (ö)güz :** ウイグル語佛教文獻には二詞一意（hendiadys）の taluy ögüz「海；海河」が頻出するが［e.g., ED, p. 502; 庄垣内 2008, p. 648］，敦煌藏經洞出土のウイグル文『善惡二王子經』には taluy「海」の異形 toluy を用いた toluy ögüz という表記も在証される［CBBMP, p. 15; cf. ATG, p. 49］。　**6A10, qočo (….) biš (……) :** 銘文の筆者名ダルマシリ（darm-a širi < Skt. dharmaśrī）に先行するので，その出身地を示す表記とみて「高昌［國の］ビシュ［バリク出身の］（qočo (uluš) biš (balïq-lïγ) ）」などと再構できるかもしれないが，實見しても十分に判讀できなかった。　**6A13, *b n di t n m s ŋ g[i](d) (. . . .) bu l su n :*** このパクパ文は，ウイグル語で bandit namasaŋg[i](d) (. . . .) bulṣun「博

4）①莫高窟第61窟東壁，西夏期「上座□□姚／巡禮山寺到／天慶五年四月廿日」［DMGD, p. 25］；②莫高窟第464窟，西夏期「大宋閬州閬中縣錦屏見在西涼府賀家寺住坐／遊禮道沙州山寺宋師父楊師父等」［DMGD, pp. 174-175］③莫高窟第108窟主室東壁「大德拾年十月十三日趙德秀至山寺禮拜」［DMGD, p. 53］；④莫高窟第45窟東壁「僧人劉祖到？山寺焚香禮拜；至順二年四月初一日道(到)了山寺記耳筆」［DMGD, p. 16］；⑤莫高窟第98窟主室南壁「至正四年四月十五日雲／遊山寺聖□」焚香記耳」［DMGD, p. 48］。

士（bandit < Skt. paṇḍita）（の）『眞實名經』……を得ますように！」と再構できる[5)]。

この銘文は全體的に煙燻を被っているため，各行とも不鮮明な箇所があり，銘文全體の解釋は困難である。とはいえ，第５行の「『眞實名經』を學んで（namasangiḍ ögränip）」という記載，また第13行のパクパ文「博士（の）『眞實名經』……を得よ！（*bandit namasaŋg[i](d) (. . . .) bulsun*）」は，『眞實名經（*Nāmasaṃgīti*）』の經典が敦煌のウイグル人佛教徒の間で廣く流通していたことを示している。前述した，敦煌出土のウイグル語書簡 Pelliot Ouïgour 16 bis でも『眞實名經』の授受が問題となっていることと軌を一にするものとみてよいであろう。

銘文6B：楡林窟第２窟，主室南壁，最も東側の説法圖の東端の白い枠線内，草書體ウイグル文１行。

01 quḍluγ luu yïl aram ay yiti yangï-da män čina išvari šabi
bu quḍluγ mančuširi bodistv-ta yuḳündüm sa
「幸いなる龍年正月初（旬の）七日に，私チナ=イシュヴァリ沙彌が，
この幸いなる文殊菩薩に禮拜した。善［哉］」
“On the 7th day, the 1st month, the fortunate Dragon year, I, Čina-İšvari-šabi, worshiped this heaven-favored Mañjuśrī Bodhisattva. *Sā[dhu]*!”

巡禮者名のチナ=イシュヴァリ（čina-išvari）は Skt. jina-īśvara “victorious lord” に由來する人名。末尾の sa は sadu「善哉（< Skt. sādhu）」を書こうとして中斷したものであろう。

銘文6C：楡林窟第２窟，主室北壁，中央淨土變相圖の右（＝東）端の黒い枠線内，ウイグル字刻文２行。

01	bu mančuširi	「この文殊師利	“This Mañjuśrī
02	bodisdw	菩薩」	Bodhisattva”

第２行の bodisdw = PWDYSDW は，「菩薩（bodistv = PWDYSTV）」の誤刻とみる。

さて，楡林窟第２窟は，西夏時代に開鑿され，モンゴル時代・清代に重修されたものである。正面となる東壁の中央には文殊變相圖が描かれることから，その主尊は文殊菩薩であったと考えられ

５）筆者は舊稿で，このパクパ字の箇所について，2006年9月の現地調査結果に基づき部分的に引用した［松井 2008a, p. 37］。しかし，その時點では『眞實名經（namasaŋg[i](d)）』の箇所は判讀できていなかった。

る［AXYLK 1990, p. 278］。現在の中央基壇に据えられた塑造の文殊菩薩像は清代のものであるが，おそらくモンゴル時代にも文殊菩薩の塑像が据えられていたのであろう。すなわち，銘文6b, 6c は，楡林窟第２窟の主尊としての文殊菩薩に禮拜した際の記念とみることができる。

銘文6D：楡林窟第16窟，主室甬道北壁，甘州ウイグル公主供養人像の西側，草書體ウイグル文２行＋パクパ字１行。

01	män yïγmïš	「私イグミシュが	“I, Yïγmïš
02	yu̧kündüm	禮拜した。	worshiped (here).
03	*m n ju ši ri*	文殊師利」	Mañjuśrī!”

この銘文は既公刊のカラー圖版［段文傑 1990: pl. 115; AXYLK: pl. 57］でも確認できる【圖版２】。第３行で斜體表記したパクパ字の「文殊師利（*m n ju ši ri* = *manjuširi*）」は，第1-2行のウイグル字銘文と字寸が近似するので，その筆者イグミシュ（yïγmïš）によって書かれたものであろう。この楡林窟第16窟の主室西壁南側には，やはり文殊變相圖が描かれている［AXYLK 1990, p. 303］。

銘文6D：楡林窟第15窟，前室西壁北側，パクパ字銘文１行。

01	*m ju ši [....]*	「文殊師利」	“Ma(ñ)juś[rī]!”

このパクパ字銘文も，おそらくは *m* ***n*** *ju ši [**ri**]* = *manjuširi*「文殊師利」と書こうとしたものと推測される。この銘文の書かれた壁面には，文殊變相圖が描かれているからである［AXYLK 1990, p. 302］。第２字の n は書き忘れられたものであろう。また語末の ri の部分は壁面が剥落している。

銘文6E：楡林窟第33窟，主室甬道南壁，供養人像の右肩脇，草書體ウイグル文２行。

01	bu quḍluγ qaču [...] taγ(?)	「この幸いなる瓜州……山(?)
02	mančuširi taγ qïlïp(?)	文殊師利山を作って(?)」

“This fortunate [.....] mountain(?) of 瓜州 Guazhou. Making(?) the mountain of Mañjuśrī ....”

この銘文は草書體で書かれており，やはりモンゴル時代に屬すると推定される。瓜州（Chin. > Uig. Qaču）が言及されるのは，楡林窟の直近の城市だからである。第２行の文殊師利に後續する「山を作って（taγ qïlïp）」は，文殊の居所としての五臺山［次節參照］を描いたことを意味するものか。あるいは -ta kälip「（文殊菩薩）に（禮拜に）來て」と讀むべきかもしれない。

注目すべきは，楡林窟第33窟の壁畫には，文殊菩薩に直接に關係するものはないことである［AXYLK 1990, p. 309］。從って，この題記が文殊師利（mančuširi < Mañjuśrī）に言及するのは，壁畫の内容とは無關係である。逆説的に，この題記を記したウイグル人佛教徒が，日常的に文殊菩薩を深く信仰していたことを示すものと考えるべきであろう。

以上，文殊菩薩信仰に關係する銘文6B ～ 6Eは，筆者が現時點までに偶然に目睹し得たものに過ぎない。しかし，管見の限り，例えば，敦煌諸石窟の佛教壁畫において文殊菩薩にしばしば對置されて描かれる普賢菩薩が，このような題記銘文で同様に言及される例は見出せない。敦煌諸石窟のウイグル語題記銘文において，特に文殊菩薩が頻繁に言及される歷史的な背景［この點については次節も參照］をふまえつつ，銘文資料の悉皆調査を繼續していく必要がある。

7．ウイグル佛教徒と五臺山

前節で扱った文殊菩薩信仰と關係して，ウイグル人佛教徒における五臺山信仰についても言及しておく。

周知のように，中國山西省東北の地方の五臺山（清涼山）は，文殊菩薩が化現する聖地として，東アジア全域にわたって崇敬の對象とされてきた［賴富 1986］。敦煌でも五臺山を文殊菩薩の居所とする信仰が盛んであったことは，莫高窟・楡林窟の壁畫にしばしば五臺山圖が描かれること［日比野 1958; Wong 1993; 趙聲良 1993; 杜斗城 2004］，あるいは藏經洞出土文獻に『五臺山讃』・『五臺山曲子』や「往五臺山行記」類が出土していること［杜斗城 1991; Cartelli 2004; 高田 2012, p. 6］から示される。また，藏經洞出土のサンスクリット語・チベット語對譯佛教語彙集や，サンスクリット語・コータン語對譯の會話練習帳からも，西暦10世紀頃においてインド・チベット・コータン人佛教徒が盛んに五臺山に巡禮したこと，また彼らの巡禮にとって敦煌が重要な中繼地點となっていたことがうかがえる［Hackin 1924, p. 40; 熊本 1988; 高田 2002, pp. 3-4; 高田 2011, pp. 3-6］。11世紀以降に河西を支配した西夏王國の佛教でも，五臺山信仰は重要な要素となっていた［公維章 2009; 楊富學 2010］。

一方，トゥルファン地域發現のウイグル文佛典のなかにも，ウイグル語譯『五臺山讃（Udayšanzan）』の異なる２寫本の斷片（Ch/U 6956; U 5684a-c）や，漢文『五臺山讃』のウイグル字音寫を含む冊子本（U 5335）[6] が發見されている［Zieme 2002］。さらに，エルミタージュ美術館に所藏される西ウイグル期のベゼクリク石窟壁畫斷片には，文殊菩薩とともに五臺山が描かれている［プチェリナ 1999, pp. 325-326］。これらは，ウイグル人佛教徒における五臺山信仰の存在を確證するものである。

６）この U 5335 は，複數のウイグル字音寫された漢語の佛教テキストを集成する冊子本であり，庄垣内正弘による包括的な研究が近刊予定である。Masahiro Shōgaito, *Chinese Text Written in Uighur Script U 5335: A Reconstruction of the Inherited Uighur Pronunciation of Chinese* (*Berliner Turfantexte* XXXVI). Ed. by S. Fujishiro / N. Ohsaki / M. Sugahara / Abdurishid Yakup. Turnhout (in press). なお，本稿成稿中，庄垣内正弘先生の訃報に接した。この場を借りて，長年にわたる御示教に深甚の謝意を表し，謹んで御冥福をお祈り申し上げる。

さらに筆者は，この間の調査において，わずか２条ではあるが，五臺山に關係するウイグル語題記銘文を確認することができた。

銘文7：楡林窟第３窟，主室西壁南側，普賢菩薩像の下，縁取りの枠線内に合計８条のウイグル文題記がある。筆者はこれを南側から(a) 〜 (h)と假に編號した。

(a) šakyapal uday-qa barïr-ta kinki-lär-kä ödig qïldïm
「私シャキャパルが，五臺に行く時に，後人たちへの記念をなした」
“I, Šakyapal, going to (= leaving for) Wudai (Mountain), made (this) record for posterities.”

(c) täväči tuḍung uday-qa barïr-ta ödig qïldïm sadu bolzun
「私テヴェチ都統が，五臺に行く時に，記念をなした。善哉」
“I, Täväči-*tuḍung*, going to (= leaving for) Wudai (Mountain), made (this) record. *Sādhu*!”

これらの銘文も草書體で書かれており，やはりモンゴル時代に屬すると推定される。銘文 7(a) の後には，モンゴル文で「幸福となりますように，と（qutuγ-tu boltuγai kemen）」という題記が續けて記されているが，ウイグル文とは別筆と思われる。

これらの銘文7(a), 7(c) の筆者は，いずれも「（楡林窟から）uday に行く」と記している。この uday は，明らかに「五臺」の音寫であり，五臺山を意味する[7)]。すなわち，これらの題記は，楡林窟から五臺山への巡禮に向かうモンゴル時代のウイグル人佛教徒によって書き殘されたものである。これは，ウイグル人佛教徒の間で文殊信仰とともに五臺山信仰が流行していたことを傍證するとともに，彼らの佛教巡禮圈が，敦煌（莫高窟・楡林窟）から東方には，瓜州・肅州や寧夏（西夏路）を越えて[8)]，山西の五臺山にまで及んでいたことを示すものである。

さて，前掲のトゥルファン地域發現ウイグル語譯・ウイグル字音寫『五臺山讃』諸寫本を紹介した Zieme は，これらの『五臺山讃』の流行を，敦煌佛教とトゥルファン=ウイグル佛教の強固な結びつきを示すものと位置づけた［Zieme 2002, pp. 223-224］。10世紀以降のウイグル佛教に對して敦

７）Uig. uday の用例は，居庸關のサンスクリット語・チベット語・モンゴル語・ウイグル語・西夏語・漢文六體合璧碑文にも在證される。この Uig. uday が「五臺」の音寫であり，五臺山を意味することは，チベット語の對譯箇所に rtse lnga「五つの頂」すなわち「五臺山（ri bo rtse lnga）」の略稱がみえることからも鐵案である［CYK, pp. 228, 238, 263, 276］。この用例に對し，Röhrborn / Sertkaya はあえて Skt. udaya “the eastern mountain (behind which the sun is supposed to rise)” と關連させる案を提示し，楊富學はこれに反論してウイグル人佛教徒の文殊信仰・五臺山信仰の觀點からあらためて「五臺」の音寫とみなすことを主張したが［Röhrborn / Sertkaya 1980, pp. 320, 333; 楊富學 2003］，いずれも，チベット語・ウイグル語對譯に關する CYK の指摘に注意していない。

８）ウイグル人佛教徒の巡禮圈については，拙稿［Matsui 2008b, pp. 27-29; 松井 2013, pp. 38-44］も參照。

煌佛教が強い影響を與えたことは, 百濟康義［百濟 1983］の創唱以來, 學界でも廣く承認されており, もちろん筆者も同意するものである。

ただし, ウイグル語譯『五臺山讃』の１件（Ch/U 6956 = Zieme 2002, A）と, ウイグル字音寫『五臺山讃』冊子本（U 5335）は, 草書體で書かれたモンゴル時代の寫本である。また, 銘文 7(a), 7(c) も, 明らかにモンゴル時代の題記である。このような, モンゴル時代のウイグル佛教徒における五臺山信仰の流行の要因としては, モンゴル帝國もまた五臺山を佛教聖地として尊崇したという歴史的状況［日比野・小野 1942, pp. 85-91; 崔正森 2000, pp. 540-546］をも考慮すべきであろう。

さらに, モンゴル帝室の歸依を受けたチベット佛教においても, 歴代帝師を輩出したサキャ（Sa skya）派は文殊菩薩を特に尊崇しており, 1244年に涼州のモンゴル王族コデン（Köden > 闊端）のもとに赴いたサキャパンディタ（Sa skya Paṇḍita）はその歸途に五臺山に巡禮している［陳慶英 2007, p. 42; cf. 福田 1986, pp. 32, 42］。のちの初代帝師パクパも, クビライ登極以前の1257年5月から7月にかけて五臺山に巡禮し, 文殊菩薩を賞賛する詩頌を殘している［福田 1986, pp. 48, 64-65; 陳慶英 2007, pp. 65-70］。チベット佛教における五臺山信仰は, つとに古代チベット帝國（吐蕃）時代から浸透していたようであるが[9)], このパクパの巡禮を契機としてモンゴル時代にさらなる流行をみることとなり, 五臺山そのものもモンゴル宮廷の庇護を受けたチベット佛教の一大據點ともなった。サキャパンディタの弟子タムパ（Dam pa）はクビライから五臺山壽寧寺の住持に任命され, また第４代帝師イェシェーリンチェン（Ye shes rin chen, 位 1286-1295）は五臺山で死去している［陳慶英 2007, p. 70］。また大德５年（1301）4月28日付の第５代帝師タクパオーセル（Grags pa 'od zer, 位 1291-1303）發行の漢文法旨も, 五臺山大壽寧寺の免税特權を確認するために五臺山で發令されたものであり, 五臺山が帝師の活動據點の一つとなっていたことを示す［蔡美彪 1955, p. 49; 中村 1993, p. 59］。

モンゴル時代, 帝國支配層の庇護を受けたチベット佛教の影響が, 甘肅河西・東トルキスタンさらに東方ユーラシア各地で活動するウイグル佛教徒にも及んだことは, 舊稿［松井 2008a, pp. 37-41］で述べた通りである。とすれば, 前節に示した文殊菩薩信仰に關するウイグル語銘文6B 〜 6E, また本節にみたウイグル人佛教徒の五臺山巡禮も, モンゴル時代のチベット佛教における文殊信仰・五臺山信仰の隆盛に影響・感化されたものであった可能性が高いように思われる。五臺山へ向かおうとする銘文 7(a) の筆者の名シャキャパル（Šakyapal）が, チベット語 Shākya dpal に由來することも, 彼がチベット佛教に接近していたことをうかがわせる。

なお, 五臺山とウイグル佛教徒との關係からは, 高昌出身のウイグル人比丘尼の舍藍藍（1269-1332）の事蹟が注目される。『佛祖歴代通載』巻22所収の傳記によれば, 彼女は成宗テムル時代（r.

９）『舊唐書』巻196下・吐蕃傳, 長慶4年（824）9月「（吐蕃）遣使求五臺山圖」［日比野・小野 1942, pp. 63-64］。

10）モンゴル時代における, 非漢族の高位の宗教者に對する稱號としての baγsi（> Chin. 八合失〜八合赤〜八合識〜八哈室〜八哈石）については, 中村・松川 1993, pp. 73-75 參照。

1294-1307), 第５代帝師タクパオーセル（迦羅斯巴斡即兒 < Tib. Grags pa 'od zer）を師として出家し，武宗ハイシャン時代（r. 1307-1311）には皇太后ダギに仕えて「バクシ（八哈石 < Mong. baγsi < Uig. baxšï「師僧」< Chin. 博士)」と尊稱された[10]。仁宗アユルバルワダ時代（r. 1311-1320）には，宮廷からの賜與を原資に，大都の妙善寺だけでなく「臺山」すなわち五臺山にも普明寺を建立して，それぞれ佛經一藏を安置させた。さらに金泥を用いた「番字（おそらくチベット字)」や「畏兀(ウイグル)字」の經典を作成させたり，また吐蕃(チベット)の五大寺・高昌國の旃檀佛寺・大都の萬安寺などに多額の資産を蓄えさせたという［cf. 楊富學 2004, p. 446; 中村 2013, p. 22］。すなわち，舍藍藍は，サキャ派出身の帝師よりチベット佛教の教えを受けてモンゴル宮廷に仕えつつ，大都・五臺山・高昌・チベットの各處を結んで佛教的活動を展開していたことになる。あるいは，銘文 7(a), 7(b) で五臺山に向かおうとするウイグル人佛教徒は，モンゴル宮廷で榮達した同族の舍藍藍が五臺山に建立した普明寺を目指していたのかもしれない。

また，至正７年（1347）に五臺山に立石された「五臺山大善法藏寺記」の所傳によれば，泰定元年（1324）に五臺山で法會を實施し，ここに大善法藏寺を建立して，後に順帝トゴン= テムル（r. 1333-1370）から「灌頂國師」號を賜った高僧アマラシリ=パンディタ（*Amaraśrī Paṇḍita > 阿麻剌室利板的答）は，「西域諸國の僧俗部族を總治」したという［日比野 1973, pp. 652-654, 657-660; 松井 2008a, p. 29］。この「西域諸國」の具體的な地理範圍・疆域は不明であるが，あえて推測すれば，アマラシリの出身地「罽賓國」すなわちカシミールや，彼が崇敬を集めたというチベット西部のヤツェ（Ya tse > 雅積）國および中央チベットのサキャ（Sa skya > 撒思加瓦）だけでなく，甘肅河西や東部天山地方などウイグル人佛教徒の居住地域も含まれていた――その意味では，前述の舍藍藍の活動地域と重なる――のではなかろうか。そして，灌頂國師アマラシリ=パンディタが「西域諸國の僧俗部族を總治した」という表現は，彼が五臺山に據點を置きつつ，文殊菩薩と五臺山を崇敬する「西域」諸地域の――おそらく，多くのウイグル人をも含む――佛教徒に対して宗教的權威として臨んでいたことを意味しているように思われる[11]。

11）11世紀以降，ウイグル佛教界における最高指導者はウイグル語で šazïn ayγučï（> Chin. 沙津愛忽赤／沙津愛護持, etc.）すなわち「教義總統」の稱號を與えられるようになり［森安 2007, pp. 16-19］，モンゴル時代においても帝國佛教界の中樞で活躍した者が複數知られている［中村 2013, p. 14］。1280年のトゥルファン出土ウイグル語文書（SUK Em01, いわゆるピントゥング解放文書）でもウイグル佛教の最高指導者として「教義總統（šazïn ayγučï)」が言及され，また『通制條格』巻4・戸令「女多淹死」の条に漢譯されて引用される至元13年（1276）7月2日付クビライ聖旨は，カルシャ教義總統（*Qarša šazïn ayγučï > 哈兒沙沙津愛忽赤）が，高昌（＝火州 < Qočo）・リュクチュン（呂中 < Lükčüng）・トゥルファン（禿兒班 < Turpan）などのウイグル王國領における事案について皇帝クビライに（おそらくは直接に）上奏していたことを示す［梅村 1977, pp. 04-06］。さらに，トゥルファン出土のチャガタイ=ウルス發行モンゴル語文書（BT XVI, Nr. 69）も，「（この文書に）その名が記された教義總統（Mong. šas-in aiγuči < Uig. šazïn ayγučï）や師僧（baγsi）たち」を筆頭とする佛教寺院への安堵状であった。この文書は14世紀中葉以降に屬する可能性が高く，この時期のトゥルファン地域のウイグル佛教徒も，

以上，わずか２条のウイグル語題記銘文 7(a), 7(b) から，ウイグル佛教徒と五臺山との結びつきについて，相當に推論を重ねてきた。今後，さらに諸史料を博捜するとともに，五臺山そのものにも，ウイグル人巡禮者に關係する題記銘文や佛典その他のウイグル語資料が殘されていないか，調査していく必要があるかもしれない。

參考文獻

Abdurishid Yakup 2006: Uighurica from the Northern Grottoes of Dunhuang. In: *Studies on Eurasian Languages: A Festschrift in Honour of Professor Masahiro Shōgaito's Retirement,* Kyoto, pp. 1-41.

安部健夫 1955:『西ウイグル國史の研究』彙文堂書店。

荒川慎太郎 2010:「莫高窟・楡林窟・東千佛洞西夏文題記譯注」荒川慎太郎（編）『西夏時代の河西地域における歷史・言語・文化の諸相に關する研究』科研費報告書（No. 19520598），pp. 45-106.

ATG = Annemarie von Gabain, *Alttürkische Grammatik*, 3. ed. Wiesbaden, 1974.

AXYLK = 敦煌研究院（編）『中國石窟・安西楡林窟』平凡社・文物出版社，1990.

BT VIII = Kara, György / Zieme, Peter, *Die uigurischen Übersetzungen des Guruyogas "Tiefer Weg" von Sa-skya Paṇḍita und der Mañjuśrīnāmasaṃgīti* (*Berliner Turfantexte* VIII). Berlin, 1977.

BT XVI = Cerensodnom, Dalantai / Taube, Manfred, *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung (Berliner Turfantexte* XVI). Berlin, 1993.

BT XXVI = Yukiyo Kasai, *Die uigurischen buddhistischen Kolophone* (*Berliner Turfantexte* XXVI). Turnhout, 2008.

蔡美彪 1955:『元代白話碑集錄』科學出版社。

CBBMP = James Russel Hamilton, *Le conte bouddhique du Bon et du Mauvais Prince en version ouïgoure.* Paris, 1971.

Cartelli, Mary Anne 2004: On a Five-Colored Cloud: The Songs of Mount Wutai. *Journal of the American Oriental Society* 124-4, pp. 735-757.

陳慶英 2007:『元朝帝師八思巴』中國藏學出版社（初：1992）。

崔正森 2000:『五臺山佛教史』上・下，山西人民出版社。

CYK = 村田次郎（編著）『居庸關』京都大學工學部，1957.

DHMGK = 敦煌研究院（編）『中國石窟・敦煌莫高窟』第５卷，平凡社・文物出版社, 1982.

DMGD = 敦煌研究院（編）『敦煌莫高窟供養人題記』文物出版社，1986.

なお教義總統の統轄下にあったことが推知される。これら，ウイグル佛教徒を統轄する指導者としての教義總統と，本文に言及した「西域諸國の僧俗部族を總治」した五臺山の灌頂國師アマラシリや，あるいは14世紀後半にチャガタイ=ウルスの保護を受けて東部天山地方～敦煌を巡禮した灌頂國師ドルジ=キレシス=バル=サンポ（Mong. Dorǰi kirešis bal sangpo < Tib. rDo-rje bkra-shis dpal bzang-po）［松井 2008a］らとの關係，さらにはモンゴル帝國治下の佛教とチベット地域を統括した宣政院とウイグル佛教徒の關係についても，なお檢討する餘地がある［cf. 中村 2013, p. 15］。

杜斗城 1991:『敦煌五臺山文獻校錄研究』山西人民出版社。

段文傑 1990:（編）『中國壁畫全集・敦煌９：五代・宋』遼寧人民出版社。

敦煌研究院考古研究所・内蒙古師範大學蒙文系 1990:「敦煌石窟回鶻蒙古文題記考察報告」『敦煌研究』1990-4, pp. 1-19, +5 pls.

ED = Gerard Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkish*. Oxford, 1972.

福田洋一 1986:「サキャ派と元朝の關係」福田洋一・石濱裕美子『西藏佛教宗義研究 第４卷：トゥカン『一切宗義』モンゴルの章』東洋文庫，pp. 29-78.

耿世民・張寶璽 1986:「元回鶻文『重修文殊寺碑』初釋」『考古學報』1986-2, pp. 253-263, +2 pls.

公維章 2009:「西夏時期敦煌的五臺山文殊信仰」『泰山學院學報』2009-2, pp. 14-21.

Hackin, Joseph 1924: *Formulaire sanscrit-tibétain*. Paris.

Hamilton, James 1992: Étude nouvelle de la lettre Pelliot Ouïgour 16 Bis d'un bouddhiste d'époque mongole. In: A. Cadonna (ed.), *Turfan and Tun-huang: The Texts*, Firenze, pp. 97-121, +5 pls.

Hamilton, James / Niu Ruji 1998: Inscriptions ouïgoures des grottes bouddhiques de Yulin. *Journal Asiatique* 286, pp. 127-210.

日比野丈夫 1958:「敦煌の五臺山圖について」『佛教藝術』34, pp. 75-86.

日比野丈夫 1973:「五臺山の二つの元碑について」『藤原弘道先生古稀記念史學佛教學論集・乾』藤原弘道先生古稀記念會，pp. 649-660.

日比野丈夫・小野勝年 1942:『五臺山』座右寶刊會。

Kara, György 1981: Weiteres über dir uigurische *Nāmasaṃgīti*. *Altorientalische Forschungen* 8, pp. 227-236, +Tafn. XV-XVIII.

百濟康義 1983:「妙法蓮華經玄賛のウイグル譯斷片」護雅夫（編）『内陸アジア・西アジアの社會と文化』山川出版社，pp. 185-207.

熊本裕 1988:「西域旅行者用サンスクリット=コータン語會話練習帳」『西南アジア研究』28, pp. 53-82.

松井太 2008a:「東西チャガタイ系諸王家とウイグル人チベット佛教徒」『内陸アジア史研究』23, pp. 25-48.

Matsui, Dai 2008b: Revising the Uigur Inscriptions of the Yulin Caves.『内陸アジア言語の研究』23, pp. 17-33.

松井太 2013:「敦煌諸石窟のウイグル語題記銘文に關する箚記」『人文社會論叢』人文科學篇30, pp. 29-50.

森安孝夫 1982:（書評）「柳宗玄・金岡照光（編）『敦煌石窟寺院』」『季刊東西交涉』1-3, p. 28.

森安孝夫 1983:「元代ウィグル佛教徒の一書簡」護雅夫（編）『内陸アジア・西アジアの社會と文化』山川出版社，pp. 209-231.

森安孝夫 1991:『ウイグル=マニ教史の研究』（『大阪大學文學部紀要』31/32）大阪大學文學部。

森安孝夫 2000:「沙州ウイグル集團と西ウイグル王國」『内陸アジア史研究』15, pp. 21-36.

森安孝夫 2002:「ウイグルから見た安史の乱」『内陸アジア言語の研究』17, pp. 117-170, +2 pls.

森安孝夫 2007:「西ウイグル佛教のクロノロジー」『佛教學研究』62/63, pp. 1-45.

森安孝夫 2011:「2006年度内モンゴル 寧夏 陝西 甘肅調查行動記錄」森安孝夫（編）『ソグドからウイグルへ』

汲古書院，pp. 474-531.

森安孝夫 2013:「東ウイグル=マニ教史の新展開」『東方學』126, pp. 142-124.

MW = Monier Monier-Willimas, *Sanskrit-English Dicitonary.* Oxford, 1899.

中村淳 1993:「元代法旨に見える歴代帝師の居所」『待兼山論叢』史學篇27, pp. 57-82.

中村淳 2013:「元代大都勅建寺院の寺産」『駒澤大學文學部研究紀要』71, pp. 1-28.

中村淳・松川節 1993:「新發現の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究』8, pp. 1-92, +8 pls.

小田壽典 1974:「ウイグル文文殊師利成就法の斷片一葉」『東洋史研究』33-1, pp. 86–109, +1 pl.

プチェリナ（Pchelina, Maria）1999:「オルデンブルグ･コレクション」田邊勝美･前田耕作（編）『中央アジア』（世界美術大全集・東洋編15）小學館，pp. 324-328.

Röhrborn, Klaus / Sertkaya, Osman Fikri 1980: Die alttürkische Inschrift am Tor-*Stūpa* von Chü-yung-kuan. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 130, pp. 304-339.

Russell-Smith, Lilla 2005: *Uygur Patronage in Dunhuang: Regional Art Centres on the Northern Silk Road in the Tenth and Eleventh Centuries*. Leiden / Boston.

庄垣内正弘 2003:『ロシア所藏ウイグル語文獻の研究』京都大學大學院文學研究科。

庄垣内正弘 2008:『ウイグル文アビダルマ論書の文獻學的研究』松香堂。

SUK = 山田信夫（著）, 小田壽典ほか（編）『ウイグル文契約文書集成 (*Sammlung uigurischer Kontrakte*)』全３巻, 大阪大學出版會。

Taisho = 高楠順次郎・渡邊海旭（編）『大正新脩大藏經』大藏出版。

高田時雄 2002:「敦煌莫高窟第十七窟發見寫本から見た敦煌における多言語使用の概觀」桑山正進（編）『石窟寺院の成立と變容』京都大學，pp. 1-14.

高田時雄 2011:「李盛鐸舊藏寫本『驛程記』初探」『敦煌寫本研究年報』5, pp. 1-13.

高田時雄 2012:「丁類『五臺山讃』小注」高田時雄（編）『涅瓦河邊談敦煌』京都大學人文科學研究所，pp. 111-124.

UBL = Johan Elverskog, *Uygur Buddhist Literature* (*Silk Road Studies* I). Turnhout, 1997.

梅村坦 1977:「13世紀ウィグリスタンの公權力」『東洋學報』59-1/2, pp. 01-031.

Wong, Dorothy C. 1993: A Reassessment of the *Representation of Mt. Wutai* from Dunhuang Cave 61. *Archives of Asian Art* 46, pp. 27-52.

謝靜・謝生保 2007:「敦煌石窟中回鶻・西夏供養人服飾辨析」『敦煌研究』2007-4, pp. 80–85.

楊富學 2003:「居庸關回鶻文功德記 uday 考」『民族語文』2003-1, pp. 62-64.

楊富學 2004:「回鶻五臺山信仰與文殊崇拜考」鄭炳林・花平宇（編）『麥積山石窟藝術文化論文集』下，蘭州大學出版社, pp. 441-447.

楊富學 2010:「西夏五臺山信仰斟議」『西夏研究』2010-1, pp. 14-22.

楊富學 2013:『回鶻與敦煌』甘肅教育出版社。

賴富本宏 1986:「五臺山の文殊信仰」『密教學研究』18, pp. 93-112.

Zhang Tieshan 張 鐵 山 / Zieme, Peter 2011: Memorandum about the King of the On Uygur and His Realm. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 64-2, pp. 129–159.

趙聲良 1993:「莫高窟第61窟五臺山圖研究」『敦煌研究』 1993-4, pp. 88-107.

竺小恩 2012:「敦煌石窟中沙州回鶻時期的回鶻服飾」『浙江紡績服装職業技術學院學報』 2012-1, pp. 38–42.

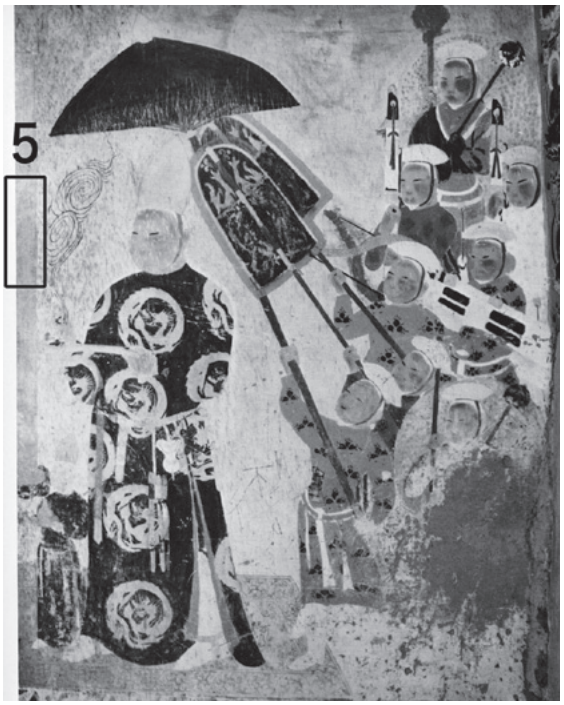
Zieme, Peter 1996: A Fragment of the Chinese *Mañjuśrīnāmasaṃgīti* in Uigur Script from Turfan.『内陸アジア言語の研究』 11, pp. 1-14, +X pls.

Zieme, Peter 2002: Three Old Turkic 五臺山讃 *Wutaishanzan* Fragments.『内陸アジア言語の研究』 17, pp. 223-239.

茨默 (Zieme, Peter) 2009:「有關摩尼教開教回鶻的一件新史料」『敦煌學輯刊』 2009-3, pp. 1-7.

【付記】本稿は，JSPS科研費 26300023, 26580131, 26284112 および東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「新出多言語資料からみた敦煌の社會」による研究成果の一部である。

圖版１　莫高窟第409窟，主室東壁南側「ウイグル王」供養人像
（柳宗元・金岡照光『敦煌石窟寺院』（世界の聖域・別巻２）講談社, 1982, pl. 43）



圖版２　榆林窟第16窟，主室甬道北壁，甘州ウイグル公主供養人像
（段文傑（編）『中國壁畫全集・敦煌９：五代・宋』遼寧人民出版社, 1990, pl. 115）



Studies in the Humanities

CULTURAL SCIENCES

Number32

LI LIANG ····· The "*Shuyuan*" of Bailudong（白鹿洞書院）and the poetic site …… 1

SEKINE Tatsuhito ····· The Treasure of Ainu and Custom of *Tsukunai* …… 1

MATSUI Dai ····· Notes on the Old Uigur Wall Inscriptions in the Dunhuang Caves（Ⅱ） ……27

Faculty of Humanities
Hirosaki University
Hirosaki,Japan

ISSN 1344-6061